

---

# WILDCAT

龍桜姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

WILD CAT

### 【Nコード】

N1102Z

### 【作者名】

龍桜姫

### 【あらすじ】

とある街へヴンズ・ウェイ、その街の外周に位置するアウター・ヘブンで暮らす金さえ払えばだいたいのことはやる便利屋の女性が主人公。

へヴンズ・ウェイとアウター・ヘブンで活躍する娯楽アクション&猫を成分とする物語。

## 第一話 野良猫（前書き）

殺人などの非合法なことや訳の分からないノリと勢い、猫に娯楽といったものが苦手な方はご遠慮下さい。

## 第一話 野良猫

小説や漫画のように目が覚めたら異世界だったなんてことはなく、ただいつもの天井が目の前に広がっているだけ。

部屋の床には、服や下着が散乱していた。

もちろん、片付けをしようと思ったことは幾度もあったがそんな時に限って、携帯がけたたましく仕事の到来を告げ、邪魔をしてくれる。

よって片付かない。友人にも、いいかげん片付けると何度も言われそのたびに片付けようと思うのだが、携帯がなる、仕事、片付かない。

このループが続いている。

「・・・なんか気だる」

私は、ラッキー・ストライク煙草を一本取り出す<sup>ラッキー・ストライク</sup>が火をつけるのをやめた。体がべとついて気持ち悪く吸う気になれない。

とりあえずシャワーを浴びることにした。風呂にも入ろうと思ったが、浴槽に湯を貯めるのが面倒でやめた。

全身を熱い湯が心地いい刺激と共に体のべと付きを洗い流し、いつものクリアな状態にする。

シャワーを浴びたあとは下着を身に付けず軽く体を拭いたあとバス

タオルを肩にかけ、部屋にある冷蔵庫からミルクのビンを取り出した。

いいかげん、二十歳すぎたのにミルクかよとよく友人に言われる。まったく自分は、これが好きなんだほつといてくれ。

世の中には酒が好きな奴が居るがあれのどこがいいんだか？

私は、窓を開け部屋に風を入れる。そして、腰に手を当てミルクを  
一気飲み。

「ぶっはー」

これを友人の前でやると親父かとツッコまれるが、出るんだから仕方がない。

さつき火をつけるのをやめたラッキーストライクとジッポライターを取って、改めて火をつける。

窓の淵に手を付きながら外を見る。空は、快晴、時折鳥たちが楽しそうに空を舞い、風が心地よい。

昨日の仕事が厄介なもので、長引いた拳闘家に帰ってきたのが明け方だった。

帰ってくるなりそのままベットにダイブ、で起きれば昼であり現在である。

右手にはアウター・ヘヴンの街が一望でき、左手にはヘヴンズ・ウェイの街が分厚い鉄の壁に邪魔されて見えるはずなんだが見えない。

そんな私の世界を眺めていると

「にゃー」

と一鳴き猫の声が横からした。

声の方向を向くと家の窓の淵に器用に座ってここが自分の定位置だ、早くミルクをよこせと言わんばかりに私が置いていたミルクビンを軽く猫パンチ。

しょうがないのでミルクをもう一本冷蔵庫から出して小皿に移し猫の元へ置くと、すぐにミルクを飲み始めた。

ここで煙草をもう一本。

「お前は、気楽でいいよな」

そう言っつて猫に微笑みかけると猫は、顔を上げ

「それでもねえですよ姐さん。こっちにだつてネコの社会つてのがあるんですぜ」

そう言っつてすぐにミルクをまた飲み始める煙草を思わず窓の外に落としてしまう。この家はかなり高い位置にあるのだが下に人がいようが今はどうだっていい。

疲れてるんだもう一眠りしよう。すぐにベットにもぐりこんで、目を閉じるとすぐに深い闇に意識が沈んでゆく。

再び覚醒するとすでに夕方。猫もいなくなっており、黄昏の夕日  
が目にしみる。冷蔵庫から三本目のミルクを取り出して、戻ってく  
るとテーブルの上に一枚の紙が置いてあることに気づく。

その紙に書いてあったものみて愕然とする。紙には丁寧にお礼が書  
いてあった。しかも、筆で。そして、文末に見事な猫の手マークが  
押してありにゃん太とご丁寧の名前まで書いてあった。

ここで本日三本目の煙草を取り出しジッポライターで火をつける。  
窓から夕日を眺めながら、煙を吐くと同時に溜息をひとつ。

「なんなんだ」

と肩を落としひとりごちる。すると、携帯の着信ゴッドファーザー  
愛のテーマがなった。

電話を取ると相手は、いつもの仲介人で急ぎの仕事が入ったからす  
ぐにやってくれとのことだ。

「ちょうどいい」

私は、一服した後椅子の上にかけてあったジャケットと床に散らば  
った下着やいつもの黒いシャツとホットパンツをとって身にまとい、  
相棒のベレッタP×4二丁の弾倉を確認して、腰のホルスターにし  
まっ。

玄関口で自分の部屋の状態を見る。今日も部屋の片づけができなかつたな、まあいい。

私は、ワルド・キヤット野良猫。名前はまだない。

さあ仕事の時間だ。シヨウタイム

私は、家を出て天国の外側と天国への道アウターヘヴンを猫のように自由気ままにヘヴンズ・ウェイ暴れまわるのだった。

. . . t o b e c o n t i n u e d



## 第二話 猫と猫

世間的には昼時、私はけだるい体をベッドから起こし何かないと冷蔵庫を開けるが中は空。

しかたがないので、椅子にかかっているジャケットを羽織り相棒のベレッタP×4を二丁腰に下げ部屋をでる。

近所の市場まで徒歩10分、バイクも自転車ないので当然徒歩。

途中、暴漢や刺客に会うこともなく、難なく市場につく。

ミルクと食料を購入して家路につく。昼に起きて出かけたのが3時前、買い物を終えるともう夕方。

なんとも1日が無駄に過ごしているが誰かに叱られるわけでもないし、急ぎの仕事があるわけでもないので問題なし。

家に帰るためには細い路地裏のようなところを通らなければならぬのだが、そこで私は頻繁に襲われていた。

職業上そうなるのは仕方ない。特に上から銃撃されたり、置いてあるゴミ箱やよくわからない荷物の陰に隠れての待ち伏せなど。

この前はいきなりRPG-7をぶっぱなしてきたバカもいて結構苦労している。まあこの生き方以外知らないので当分このままだが。

突然何かの気配を感じたので荷物を地面に落して、二丁のベレッタを取り出し構えると同時に目の前が真っ暗になる。

しまった。

内心舌打ちし、抵抗せずベレッタP×4を下ろす。そのまま動かずにいるともそもそと顔あたりで何か動き少々くすぐったくなつた。

何か変だ周囲から何も反応がない。

そーっと得物を腰のホルスターに収めることもできる。

周囲に警戒をしつつ手を顔に持っていくともふもふ。

どうやら、柔らかいぬいぐるみのような物体が張り付いているようだ。

私は、周囲を再確認。

殺気などの危ない気配は感じられないので顔に張り付いている物体ををつかむ。

「こゃ〜」

と一鳴き。

内心ため息ついた、また猫かと。そして、とりあえずひきはがすと黒猫だった。

「今度はしゃべらないよな」

つつい、独り言を吐く。先日の事があるからつい出てしまう。

黒猫は、ジタバタし始め自分の手から脱出したあとその辺にある壁などをつかい、俊敏な動きでジャンプ。

私の頭に着地してたれパンダならぬたれ猫になる。そして、

「にゃー」

と再度一鳴き。どうやら、自分の頭が気に入ったようだ。満足そうにたれている。

とりあえず、害はななので放置することにする。

食料の入った買い物袋を拾い家路につこうとすると複数の殺気感じ、買い物袋を抱え路地の脇に飛び込んだ。

刹那、銃撃。さっき立っていたところにハチの巣になる。

まさか、頭上の猫が協力者で引き寄せたのか？と思っただが、猫は、気持ち良さそうにたれている。

しかもかなりリラックスしているようなので、どうやら違うようだ。

とどうしても猫にも人間並みの知性があるという方向に思考を持っていてしまう。

私は、ゆっくりと顔を出す。すると複数の銃声と共に弾丸の雨あられ。夕日の逆光により刺客の顔まではわからなかったが、

人数とどんなタイプの得物を使っているのが分かった。

相手の得物マシンガンのような連続的な銃撃ではなく、割りと間隔を開けた銃撃なのでオートマチックやセミオートのピストルタイププの銃、

もしくは、マグナムなどのリボルバータイプ。

血が騒ぐ。

逆境は、最高の媚薬。私をハイにする。

ここで、ラッキーストライク煙草に火をつけた。

「さあ、もっと、もっと私を追い込め」

頭に猫をのせながら銃をかまえ、怪しい独り言を言っている図は、はたから見ればシニールであるがそんなことはしらねえ。

私は、刺客が近くに来るのを感じさらに気持ちが高ぶる。そして、煙草の煙を吐くと路地の脇から飛び出しベレッタP×4のトリガーを引いた。

刺客は五人。そのうちの一人に命中し、銃弾をばらまき弾幕を張ってきた。

私は、自分に直撃コースの弾丸だけ撃ち落とす。

頭上の猫は、このいかれた音楽ロックにのって流れ弾をツイスト、ゴーゴ  
ー、などダンスを踊りながら回避。

今回の猫もただものではないらしい。全く大したものだ。

私はついつい笑みがこぼれた。

弾丸の雨の中、ダンスステップを踏むかのごとく駆け抜け敵までの距離を詰め、飛んだ。

そして、刺客の背後に回りまず一人。左のベレッタで頭をぶち抜く。続いてもう片方のベレッタでもう一人。

その隙に残り二人がナイフを抜いて挟撃を仕掛けてくるが両腕をクロスしベレッタのグリップの底で受け、はじき飛ばしトリガーを引いてあえなく THE END。

相棒たちをホルスターに収めると、一気にクールダウン。興奮状態からいつもの気だるい状態に戻る。

猫も、ダンスファイバー状態から再度頭上でたれる。

「さて、帰るか」

と猫に向かって言うと

「にゃん」

と猫も一鳴き。

私は、啞えたラッキーストライクをその辺に捨て火を消す。

そして、もう一本取り出して火をつけた。黄昏時の夕日が目にしみ

たが心地いい。

とここで終わればそれなりに締まったはずなんだが、ゴミ屑同然になった食料やミルクのことを思い出しもう一度市場に引き返すのだった。

食料などを買い直し家に着くとちょうどその時、携帯電話がなる。誰だと思って番号を見ると友人の番号だった。

「どうした？」

「どうしたじゃねーよ、やっとつながった。めずらしくお前から連絡するって言うっておきながらまったく連絡してこねーじゃねーか！で今日は、どうするんだ？」

「.....」

思考数秒、一応脳内の記憶を掘り起こす。そういえば昨日連絡した。

「忘れてた。すぐ来い」

「おい忘れてたつて。全く……わかった。すぐ行くから前みたいにとっかに行くなよ」

電話を切つて、ラッキーストライク煙草を1本取り出し火をつける。

この友人は私が何時も来いと言えばたいてい来てくれる。

何故だろうか。

特にイライラしている時や予定を入れていなくてもふらりと来てくれた事もあった。

そして、食事を作ってくれるし、文句を言いながらも掃除洗濯何でもやってくれる。

何ともまあできたやつだ。

いや出来た嫁と言つべきか。

「くくくく」

楽しみになつて鼻歌を歌っているとたれ猫が頭上で鳴いた。

. . . t o b e c o n t i n u e d

## 蛇と嵐

生きるために、人を殺して金を手に入れた。生きるために、盗みもやった。けれども、私が子供の頃に誰かに拾われ、この世界に居なかつたら私はどうなっていたのだろうか？

ヘヴンズ・ウェイで仕事を終え、商業地区で買い物しながら歩いている親子を見るとそんなことを考えてしまった。

「らしくねえな」

ラッキーストライクをくわえながらひとりごちる。子供の頃から私は、一人で生きてきた。今更、分岐した未来を欲してどうなる？

届かないものをねだつてもどうにもならない。どこぞの猫型ロボツトに助けられて叫ぶのか？

冗談じゃない。

今の私は、路地裏で震え誰かの助けを待つのではなくこの生き方を選んでここにいるんだ。

その間に会って別れた奴は数多い。時には、共に。時には、対峙したり。

こんな仕事をやっていると感じさなんて感じて暇もなかつたつてのに、ふと時間ができて違う世界を垣間見ると感傷に浸ってしまうなんて、私は老けたのか？



そんな考えを巡らせていると頭の上に乗っている猫がその愛らしい手で私の頭を、ぼん、ぼんと軽く叩いた。

「ニャー（らしくないじえ〜）」

何となく私の気持ち猫に伝わったのか猫は一鳴きした。もちろん猫の言葉がわかるわけではないので（いつぞやは夢に決まってる）何を言ってるのかわからないが、なんとなく慰められているような気がした。

まあ今は、こいつや友人も含めてひとりじゃないな。そんなことを考えつつ家路につく。

アウターへヴンに戻って、へヴンズウェイと街並みが一枚の壁に遮られるだけでこつも違うのかと感じていた。その上、ここに集まってくる奴は、何かとワケが多いときている。

そのせいか、そうさせる何かがあるのかは、わからないがこつと向こつこの治安、街並みなどがどんどん対照的になっていつている気がする。

そんなことを考えつつ家の近くまで来ると妙な雰囲気とともに男が一人立っていた。

「またか」

顔にてを当てひとりごちる。そして、相手を見た。黒い鍔広帽に黒

いロングコートを着ている顔は下をむいているため帽子の陰に隠れ見えなかった。しかし、頭の上にいる誰猫が震えているのが伝わってきた。

そこから異常であることを感じた私は、警戒しながら男との距離を縮めていく。目測で男との間合いが三メートルぐらいに近づくと突然、男が口を開いた。

「ワイルド・キャット、待っていましたよ。あなたが来るのを」

「で私になにか仕事の依頼か？」

男は顔を上げる。そこにあつたのは笑顔だったが目は笑っていない。笑うのではなく何か恍惚としたものが浮かんでいた。決まってこのあとは、人の話を聞かず自己陶醉したセリフか訳のわからない自分の美学とか語るんだろうな。

「いえそうではないですよ。私はこう思っているのですよワイルドキャット、ああー何故あなたはそんなにも美しいのだろうかと」

「All right」

男は突然両手を広げ満足そうに語る。

私の方はため息を一つ。

全く、私の方が両手を広げたいよ。

「綺麗な蒼く長いサラサラの髪、深く鋭く冷たい蒼い瞳。俗物の様に胸や尻、腰、腕、全身にかけて無駄なぜい肉など無くすべてが整

っている」

好きな相手に告白するようにそして、素晴らしい芸術を見て感動するように私の容姿について語る。

「それは何か、私が貧乳で貧相な体つきで背が低い子供体型な女だとも言いたいのか？ O k e y O k e y . . . ブツ殺す！」

私は、その表現が余りにも不愉快だったため銃を抜き、素早くトリガーを六回引く。しかし、銃声と共に弾丸が男を捉えることはなかった。ただ、帽子だけは仕留めることができた。

「そうです。その殺気もまた素晴らしい快感を私に与え、あなたの美貌を引き立てる」

男の手にはコルト・パイソン（4インチモデル）が握られていた。それで、私が撃った弾を撃ち落としたのだろう。

「変態な割に腕は立つようだな」

「私は、こう思っているのですよ。あなたは美しく実に素晴らしいが何か足りないよ。そう．．．華が、血というあの紅い薔薇の華が足りないのですよ」

「結局は、戦いたいんだろ．．．相手になつてやるぜ！」

私は、ラッキーストライクを一本取り出し火をつける。タバコの煙を吐くと同時に背中に来るピリピリとした感覚を味わった。殺気や狂気とも取れるこの気配を肌を感じ私は自然と笑みがこぼれる。命のやり取りをするときの感覚だ。

私が投げ捨てたラッキーストライクが地面に付くと同時に男は笑いながら発砲する。私は、それに反応して体をよじり弾丸を避けつつ反撃した。男も撃ち落としたり、ステップを踏みながら踊るように回避していく。

かなりの狂人であるが腕は悪くない。

腕の動かし方、立ち位置、弾の軌道予測、反応速度、どれをとっても悪くはない。そう、悪くはないのだ。私は、すぐ近くに止めてあった車の影に隠れるべく牽制をいれ走る。

銃弾の雨をかいくぐりつつくるまにたどり着いた刹那、右肩に激痛が走る。男は、私が隠れた車の影に弾を撃ち込んできたようだ。

「悪くないって言ったのは訂正だ。ド畜生！」

誰に聞かせるわけでもなく罵倒する。

どうやって打ち込んできたのかはだいたい想像がついた。銃弾の雨を降らせると同時に軌道を計算して跳弾させ飛ばしてきたんだろう。

とんだ達人だぜ。

この状況で私はこの狂人との戦いに喜びを感じていた。最近の私は簡単な仕事ばかりで骨のあるやつとも戦うことはなくかなり退屈していたのだ。そこにやって来たこの男。

「くくく」

高揚感、気を抜いたらすぐにやられそうな張り詰めた空気、弾丸が肌を焼く感覚、すべてが私が私を生きていると感じさせてくれる。

「どうしたんですか？ワイルド・キャットあなたは、そんなにも弱かったのですか？そんなはずはないでしょう。私の前に初めて現れた時に見せてくれた輝きはどこに行ったのです！全てを蹂躪し戦場を駆け、戦う相手と踊る華麗なダンス、さあ華麗なる妖精の姿を見せてください！」

どうトチ狂ったらあんなのに成るんだらうな？

「勝手に変なイメージで私を語るんじゃないよ！」

私は、とりあえず罵倒してどう反撃に出ようかと思案しながら車越しに相手を盗み見していると猫が頭をぽん、ぽん、と二回叩いた。そして、猫は頭から飛び降り地面に座り敬礼する。

「お前が行くつてののか？」

「にゃっ！」

と短く一鳴き。思考時間一秒。

「All right」.

私の言葉で猫は、素早くかつ勇猛に私の頭を踏み台として空に飛び上がった。私の方に近づいてきた男が一瞬でそれに反応し、コルトの引き金を引く。

「そんな小細工で私は倒せませんよ」

「確かに小細工さ。でもな、それで十分なんだよ！」

猫は空中で銃弾を体をひねり紙一重の見事な回避を行い男の顔面まで到達し視界をふさいぐ。

「馬鹿な！」

猫を顔から引き離そうとしている間に私は車の影から飛び出し、素早くベレッタP×4のトリガーを引く。

猫が男の顔から離れ男の顔を弾丸が捉え倒れると思われた。

しかし、男は踏みとどまった。頭自体はのけぞっているが、二本のあしでしっかりと大地を踏みしめて立っている。

頭を勢い良く持ち上げた男。その顔はとてもいい笑顔だったが違和感を感じる。

「全く・・・今度はこっちが馬鹿なって言いてえよ」

違和感の正体は、弾丸だった。そう、奴は飛んできた弾を歯で受け止め、いや噛み止めていたのだ。

「こんな事もあるうかと、私の歯は全て人工歯根インプラントとなっていて、歯の素材に関しては企業秘密だそうで私にもわかりませんが・・・さあ続きと行きましょう」

しかし、私の顔も笑っている。何故ならこんなにも楽しい相手は久しぶりだからだ。

短くなったラツキーストライクを捨て私は、全力で男との間合いを詰めるべく走り出す。

相手の男は、狙いを定めるでもなくコルト・パイソンを握りただ立っていた。殺気を感じた私は、急停止して距離を取るためバックステップ。

刹那、私がいたところに穴があく。見ればコルトパイソンの銃口が私の方をむいていた。そして、コルトが牙を剥く。

「チツ！」

ベレッタPx4を構えて撃つ。甲高い金属音と共に弾丸はあさつての方向に飛んでいく。ここでお互いリロード。

そして、ベレッタがコルトが吠える、吠える、吠える！

二発は相殺、残りの一発がお互いの顔をかすめ裂傷を付ける。私は、男の体から出る気配を感じることに全神経を集中させる。

二人は沈黙、気配を伺う。

こういう場合先に動いたほうが負けることが多いという。しかし、私は男より先に動いた。男もそれに対応して発砲。私に向かって弾丸が飛んでくる。

私は、それを体を捻って躲し同時にナイフがグリップ下についたベレッタPx4を投げた。男は、飛んできたものを右に飛んで躲した。

そこを狙って私は男に詰め寄り顔を叩き込む。相手のがけぞったところにもう一丁のベレッタP×4を抜くが撃たせてはくれなかった。

のけぞっていたが倒れていない男の拳が私をの腹にはいる。相打ちになりすぐに体勢を立て直し銃を構える。

だが銃口は二人の眉間をポイントしていた。

「お互いチェックメイトだ。さあどうする？」

「そのようですね。どうしましょうか？」

数秒の沈黙。

そして、二人は動き出す。

男は後ろに飛び退く。しかし私は、相手のそれよりも早く顎を蹴り上げるようにバック転。

いわゆるサマーソルトキックをはなつ。それが見事に男の顎を捉え、後ろに飛び退く勢いも加算され派手に一回転して地面に叩きつけられた。

私は、そこに容赦なくベレッタをポイントして引き金を引く。

今度こそ男の頭に命中。男は少しうめき声を上げ一瞬だけ痙攣して動かなくなり地面には血が溢れ出しその海に眠る。

私は、ラッキーストライクを取り出し火を点け、男の死体を一瞥し



たと踵を返し、

「久しぶりに、燃えたよ。けど、私程じゃない。あんたの敗因について私はこう思ってるんだ速さが足りねえってな」

私のかわりにジツポライターの蓋が締まる乾いた金属音が答えてくれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1102z/>

---

WILDCAT

2011年12月11日01時46分発行